



# 平安だより

世田谷平安教会付属平安幼稚園  
2017年 9月号

## 「スズの兵隊」

牧師・園長 長村亮介

スズの兵隊は、ストーブのなかで、あかあかとして  
らされて、立っていました。からだじゅうが、あつ  
くてたまりません。でも、それが、火のせいなのか、  
それともむねのなかにもえている愛のためなのか、  
わかりませんでした。スズの兵隊のきれいな色は、  
すっかり、おちていました。それが、旅のあいだに、  
おちたものか、悲しみのあまり、そうなったものか、  
だれにもわかりませんでした。

スズの兵隊は、じつと踊り子を見つめ、踊り子も、  
兵隊を見つめました。そのうち、スズの兵隊は、じ  
ぶんのからだが出ていくのがわかりました。それ  
でも、鉄砲をかついだまま、しっかり、立っていま  
した。

そのとき、ふいにドアがあいて、風がふきこみ、  
踊り子をさらいました。踊り子は、空気の精のよう  
に、ひらひらと、ストーブのなかの兵隊のところへ  
とんでいきましたが、すぐにめらめらともえあがつ  
て、きえてしまいました。

スズの兵隊も、すっかりとけて、小さなかたまり  
になっていました。  
あくる朝、女中さんが灰をかきだしたとき、ストー  
ブのなかには、小さなハートがたの、スズのかた  
まりが、のこっていました。

踊り子のほうもスカーフのかざりがのこっている  
だけで、それも、真っ黒こげになっていました。

(作：アンデルセン 訳：光吉夏弥)

ご紹介したのは、アンデルセンの「スズの兵隊」から、  
その最後のところですが、このスズの兵隊は「一本の古い  
さじから生まれた」二五人のうちの一人でしたが、ひと  
りだけ他の兵隊と違って、一本のさじからではスズの量  
が足りなくて一本足でした。しかし「一本足でしっかり  
立っていた」とあります。踊り子はきれいな紙のお城の  
前に立っている、きりぬいた紙でできていて、青いリボ  
ンのスカーフに大きなきらきらした飾りをつけながら、  
両手を上げ、片足をとても高く上げて、やはり一本足で  
立っているバレエの踊り子です。片足のスズの兵隊とこ  
の踊り子は、夜、他のおもちゃたちがどんなに騒いでも、  
ただ静かに見つめ合っていました。ところが、びっくり  
箱に入っていた小さな黒鬼によって「スズの兵隊」は外  
に放り出されてしまい、それから長い旅をして、ようやく  
元の踊り子のいる家に帰って来た結末が、上にご紹介  
した場面です。

子どもたちの絵本を読んでいると、楽しいものもち  
ろんありますが、美しいものというところ、この「スズの兵  
隊」のような悲しい物語の方が多いように思います。そ  
してどの作品も子どもたちに伝えようとしているのは、  
悲しみの中にこそ現れる心の美しさなのではないかと思  
うのです。このスズの兵隊と踊り子も、ただ見つめ合う  
ことしかできない存在なのに、ストーブの炎に焼かれる  
ことによって、はじめて一つになれるのです。「小さなハ  
ートがたの、スズのかたまり」と「真っ黒こげのスカー  
フのかざり」は、真実なものは決して滅ぼされること  
がないという希望を、私たちに示しているように思います。  
まだ幼い子どもたちの心に、真実に生きることの美し  
さを、その人生の初めに教えてあげたいと思います。Ω  
「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつま  
でも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」  
(コリントの信徒への手紙一 一三章一三節)